

4 様々な教育課題へ対応するために

Q20

児童生徒の理解を基に学級づくりをしていくには？

ポイント

学級では、児童生徒が様々なルールや人間関係の中で生活をしています。その集団の中で、一人一人が充実した生活を送っているかを診断する手段として、Q-Uなどの検査があります。それらの検査結果を正しく分析し、児童生徒を理解していくために、次のような研修が考えられます。

- (1) Q-Uなどの検査を利用して学級の状態を把握する方法を学ぶ。
- (2) 事例研究会を行い、具体的な対応策を考える。

(1) Q-Uなどの検査を利用して学級の状態を把握する方法を学ぶ

Q-Uなどの検査を用いて、学級内の児童生徒の状況を把握することは、多くの学校で行われています。大切なのは、その結果をどのように分析し、どのように学級経営に反映させるかです。例えば次のような方法が考えられます。

- ① 校内にいるQ-Uなどの検査に詳しい教職員が講師となって、または近隣校にいる教職員を外部講師として招いて、その分析方法、活用の仕方等について学ぶ。
- ② 自分の学級の結果について分析し、ルールづくり、人間関係づくりを観点とした学級全体の傾向や、「要支援群」に入る児童生徒について把握し、対応策の方向をつかむ。

(2) 事例研究会を行い、具体的な対応策を考える

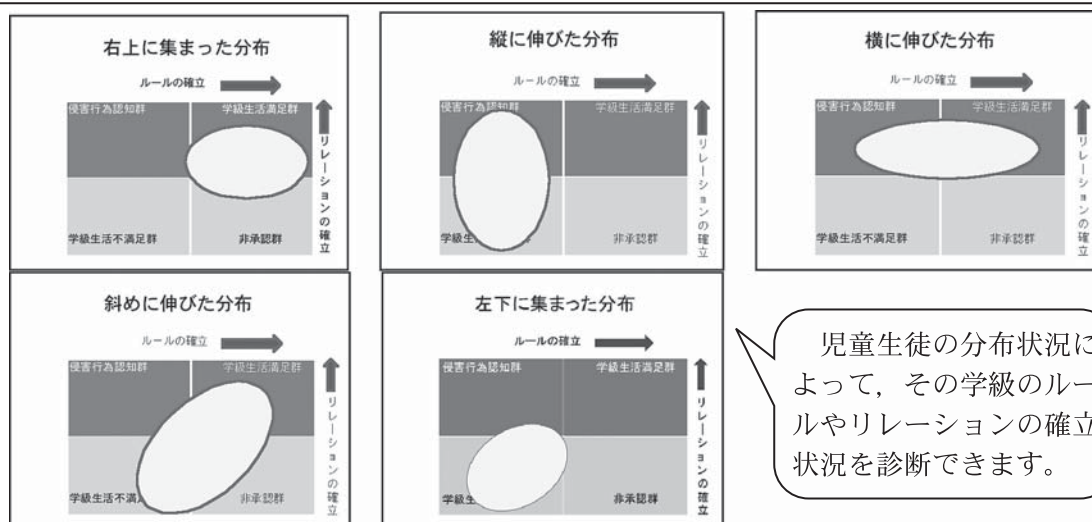
Q-Uなどの検査結果をもとに、一つの学級についての事例研究会を行います。事例研究会での効果、利点は以下のようなものです。

- ① 学級経営について対応方法のヒントがもらえる。
- ② 具体的な対応方法が分かる。
- ③ 事例を提供したり、経営状態をオープンにしたりすることで、研究会で責められることはない。
- ④ 「～について私はこう思う」という意見の出し方なので、仲間の教師と人間関係が良好になる。
- ⑤ 約1時間程度で実施できる。
- ⑥ プロット図を中心とし、事前資料は、省くことができる。

Q-U調査を利用した学級づくり

Q-U調査により学級の状態を把握する方法

Q-Uなどの検査に詳しい教職員，または外部講師による分析方法の講義



児童生徒の分布状況によって，その学級のルールやリレーションの確立状況を診断できます。

- ・分布の傾向から「ルール」が足りないことが分かった。学級の中にルールを作る必要があるな。
- ・A子は「要支援群」にいる。すぐに個別支援を行わなければいけないな。校内の支援チームの協力も必要だな。



事例研究会を行い，具体的な対応策を考える

- 事例提供者は学級の事例の一部を発表する。参加者は，プロット図にマークしたり，書き込んだりする。
 - 学級のリーダーを説明する。
 - 配慮を要する児童生徒を説明する。プロットが予想外の児童生徒を説明する。
 - 児童生徒の主なグループの説明をする。
 - 学級の問題と思われる内容を説明する。
- 参加者は，事例提供者に質問し，事例に対する情報を得る。
- アセスメント（Q-U調査の結果からどのように個々の児童生徒や学級の状況をつかむか）
 - 参加者が，問題発生・維持の要因をなるべく多くカードに記入する。
 - 全員のカードを出し合い，似た内容のものを集めて画用紙に分類し，タイトルを付ける。
 - 画用紙を重要な順番に並べる。
- 対応策の検討
 - 画用紙の対応策を具体的な行動レベルでできるだけ書き出す。
 - カードを出し合い，対応策別に分類する。
 - 統一の対応策を決める。1ヶ月後の到達目標を明確にする。
 - 事例提供者が不安に感じる点を確認する。
 - 事例提供者の取り組む内容を発表する。
 - 1ヶ月～2ヶ月後にQ-U調査の再実施。

子ども・保護者・地域からの信頼を高めるには？

ポイント

子ども・保護者・地域からの信頼を高めるには、教職員が教育職としてのやりがいや使命感、所属感を感じながらも、自分や職場に潜む「弱さ・危うさ」を自覚し、自分の問題としてとらえて、日常の実践につなげていくことが重要です。

- (1) 学校・子ども・職場の「よさ」に目を向ける。
- (2) 自分や学校の中に潜む「弱さ・危うさ」を認識する。
- (3) 具体的な事例から学び、日常の活動に結び付けていく。

(1) 学校・子ども・職場の「よさ」に目を向ける＜やりがい・使命感・所属感＞

- ① 「よさ」を出し合うことで、教職員としてのやりがい・使命感や職場への所属感を感じ、更によくしていこうという意欲をもつことにつながります。元気が出る研修にしましょう。
- ② 新年度、人事異動などで新たに赴任された教職員の新鮮な感覚を大切にして、アンケートなどをとっておきましょう。より「よさ」が鮮明になります。
- ③ 子どもの「よさ」の背景には、教職員のよい指導があることを確認し、子どもの姿から見えてくる教職員の「よさ」を引き出しましょう。

(2) 自分や学校の中に潜む「弱さ・危うさ」を認識する＜自分のこととして考える＞

- ① 「よさ」と背中合わせの「弱さ・危うさ」はないかを考え合い、全体で共有しましょう。
- ② 自分や職場に潜む「弱さ・危うさ」を認識して、自分のこととして考えましょう。
- ③ 自分を見つめ直し、今まで出会った子どもや同僚、支えてくれている家族に思いを寄せながら、「誓い」や「更に信頼を高めるための私の心がけ」を書き、更に意識を高めていきましょう。

(3) 具体的な事例から学び、日常の活動に結び付けていく＜実践化・日常化＞

- ① 具体的な事例から様々な背景や心がまえなどを学びましょう。
- ② 飲酒会合届けや個人情報管理簿など、日常の中でお互いに点検し合えることを確認しましょう。
- ③ 標語やキャッチフレーズなどを目に見えるところに掲示して、意識を継続させましょう。

子どもや職場の「よさ」を自覚しながらも、潜在する「弱さや危うさ」に気付き、自分のこととして考える

○子どもや職場の「よさ」を自覚し、教職員としてのやりがいや使命感・所属感を感じましょう。

子どもの姿から

事前のアンケート調査から

- ・ 元気、パワーがある
- ・ 落ち着いた学校生活
- ・ 応援が素晴らしい
- ・ あいさつができる

職場の様子から

- ・ 活気あふれる部活動
- ・ 明るくて教職員の仲がよい
- ・ あたたかい雰囲気
- ・ 堅苦しくなくて適度なところ
- ・ エネルギーがある
- ・ 親しい教職員児童生徒間

研修でのグループワークでの語り合いから

あいさつ等でよい姿がある。先生たちの努力の成果だ。もっとよくなる。

先生も子どもも元気で明るく仲がよい。

困った時に支えてくれる仲間がいる。



○よさと裏腹に「弱さや危うさ」があることに気付き、自分のこととして考えていきましょう。

- ・ 「教職員の仲がいい」 → 教職員同士の度が過ぎた言葉遣い → 「パワハラ発言・セクハラ発言」
- ・ 「堅苦しくなくて適度なところ」 → いい加減さ → 「個人情報漏洩」「飲酒運転」
- ・ 「親しい教職員児童生徒間」「エネルギーがある」 → 子どもへの気配りのない言動 → 「暴言」「体罰」

自分は・・・自分たちは・・・本当に大丈夫だろうか？



○今まで出会った子どもや同僚、支えてくれている家族にも思いを寄せながら、今の自分を見つめ直して、「誓い」や「更に信頼を高めるための私の心がけ」を書きましょう。

私の心がけ



「日々の忙しさに流されてしまわないように、一日の終わりに机上等の環境を整えて、気持ちも整理してから帰る」

「心の安定には家庭も大切。上手に時間を生み出して、メリハリのある生活をしたい」



「自分の行動に責任をもつことはもちろん、ストレスを一人でため込まないように仲間に相談する。そして教職員、生徒、保護者、自分の家族に悲しい思いをさせることのないようにしたい」

【先生方の声】

- ・ 自分だけ気を付けていればいいという問題ではないことを痛感した。
- ・ 今まで出会った人達や家族を意識しながら「誓い」や「私の心がけ」を書いたら、一人で生きているのではないと思ったし、日々の当たり前の事が大切だと思った。

危機管理に関する研修を進めるには？

ポイント

危機管理に関する研修を進めるには、「危機を未然に防ぐこと」「危機が発生した場合に適切な対応がとれること」の両面から研修の方法や内容を考えることが重要です。

- (1) 自校の状況を見返し、「起こりうる危機」を想定する。
- (2) 具体的な事例から、危機が起きたときどう対応すればよいかを考え、適切な動きや判断力を身に付ける。

(1) 自校の状況を見返し、「起こりうる危機」を想定する

- ① 日常の教育活動の中で「ヒヤリ・ハット」した体験をアンケートでとったり、自己チェックシートで自校の状況を振り返ったりしておきましょう。自校における「起こりうる危機」が想定しやすくなります。
- ② 小グループで意見を交換し、模造紙にまとめることで、参加意識が高まり、自校の状況や課題が見えてきます。また、全体で発表し合い、自校の課題を整理し、危機管理意識を共有しておきましょう。

(2) 具体的な事例から、危機が起きたときどう対応すればよいかを考え、適切な動きや判断力を身に付ける

- ① 危機管理に関する事例は、多種多様なので、自校における「起こりうる危機」の事例を基に研修を組み立てるとより有効です。
 - ② グループで具体的事例を基に解決策を探る演習や、ロールプレイで模擬体験しながら適切な対応を考え、知ることが大切です。外部の専門家を演習に活用することも有効です。
 - ③ 自然災害等に対する危機管理研修は、現在行っている避難訓練や防災・防犯訓練を実際に起きたときのことを想定しながら、見直すことから始めましょう。
- 例えば、休み時間を活用して、緊急地震速報を放送で流し、一時避難（近くの安全な所に避難する）の訓練を毎月短時間位置付けるなど、時間や場所、方法を工夫して行いましょう。

自校にも起こりうる危機を想定しよう

教職員が学校生活で体験したことがあるヒヤリ・ハット事例や日頃感じていることから、自校で起こりうる危機を想定しましょう。

- ・本校はいろいろな場所から校地内や校舎内に入ってくる事が可能。不審者でも入ることができそう。
- ・学校内の駐車場で、生徒が保護者の車とあと少しで接触して事故が起きそうになった。
- ・生徒が部活動中に、一度に何人も過呼吸になってしまった。どう対応してよいのか困った。
- ・職員室の机の鍵をかけ忘れてしまった。コンピュータにUSBメモリーを接続したまま帰宅してしまった。
- ・つい最近地震があった。停電があった。等々

不審者対策は大丈夫だろうか？

交通安全の対策は十分だろうか？

救急対応はできるだろうか？

教職員の個人情報等の管理は？

災害時の対策は？

危機対応（不審者対応）をロールプレイで模擬体験しよう

R中学校では、自校で起こりうる危機の場면을想定し、不審者対応をロールプレイで模擬体験する研修を行いました。ロールプレイでは実際の対応の仕方を学ぶだけでなく、それぞれの役割（立場）を演ずることで、感情を分かち合い、互いを理解することができ、共通意識が生まれます。

- 1 場面を設定(想定)しよう
- 2 役割を決めよう
- 3 やってみよう
- 4 問題点を洗い出し、再度やってみよう
- 5 研修の振り返りをしよう

問題点

- ・不審者かどうか判断が難しい
- ・どう声をかけるのがよいか
- ・怖い
- ・どう危険を知らせるか
- ・どこへ避難させるか
- ・何を優先させればいいのか



改善策

- ・合図や放送の仕方を決める
- ・生徒の避難優先、不審者から目を離さない
- ・声をかける
- ・複数で対応する
- ・距離をとる
- ・さすまたを持参する



【参加した先生方の声】

- ・いかにも不審者という格好をしていればよいが、そうでない時の不審者の見分け方が難しい。来校者には必ず声をかけることが大切だと感じた。
- ・まずは生徒の安全を確保することが大切だが、不審者が刃物などを持っていたら、どう対応したらよいか不安になる。さらに研修が必要だ。
- ・それぞれの立場で動きが違ふし、感じ方も違ってくる。やってみてロールプレイは効果的だった。

教職員の I C T 活用の意欲を高めるには？

ポイント

I C T 活用の意欲を高めるには、実際にその機器を使ってみることが一番です。校内の I C T に強い教職員が中心になって、I C T 機器のワンポイント活用法講座などを行い、全ての教職員が機器に触れ、自分の授業で使えそうだという実感をもつことが大切です。例えば、次のような研修が考えられます。

- (1) 同僚の日々の授業における I C T 活用から学ぶ。
- (2) 全国的に先進的な取組をしている学校の事例から学ぶ。

(1) 同僚の日々の授業における I C T 活用から学ぶ

校内には、日々の授業で I C T 機器を利用して、教育効果を上げている教職員がいるのではないのでしょうか。その教職員が講師となり、具体的にどのような場面で、どのように機器を活用するのかについてワンポイント講座を行ってみましょう。例えば、次のような内容については、比較的誰でも授業の中に取り入れていけるのではないのでしょうか。

- ① デジタルカメラを使って子どもの作品やノートなどを撮影し、電子黒板等に映し出して共同追究に生かす。
- ② プレゼンテーションソフトを使って、資料を作成し、授業の効果的な場面で活用する。
- ③ デジタル教科書を電子黒板で活用する。
- ④ 統計処理やグラフ表示などをコンピュータ処理して、その後の考える時間を多く確保する。

(2) 全国的に先進的な取組をしている学校の事例から学ぶ

文部科学省の委託事業である「国内の I C T 教育活用好事例の収集・普及・促進に関する調査研究事業」※の事例集などを参考に、先進的な取組をしている学校の事例を知り、自校でもできることを考えていくことも、I C T 活用への意欲を高める上で有効です。事例集には、次のような例が掲載されています。（※ <http://www.eduict.jp/jireishu/> にてダウンロードできます）

- ① 電子黒板を導入、発表などの場面で活用する事例。
- ② タブレット P C を使って自分の考えをまとめ、それを電子黒板に投影する事例。
- ③ 体育で自分たちの運動の様子をビデオで撮影し、電子黒板で再生して技能向上を図る事例等。

ICT活用の意欲を高める

同僚の日々の授業におけるICT活用から学ぶ

〈学年会や教科会で20分間確保して行う、ICT活用ワンポイント研修の例〉

- (1) 研修で取り上げるICT機器を絞る。



今日は、デジタルカメラと電子黒板を使って授業の効果を上げている実践について情報交換します。

- (2) ICT機器を日々の授業で活用している教職員が、その具体を説明する。

私は、デジタルカメラをグループに1台ずつ配って、グループ追究でまとめたワークシートを撮影させ、共同追究での発表時に、電子黒板に映して発表させます。工夫している点は、
・・・です。配慮している点は、・・・です。



- (3) 説明に対して、質問したり、実際に機器を操作してみたりする。

意外と簡単！これなら自分にもできそう。

- (4) 明日の授業から取り入れることができそうな場面をイメージする。

今までデジタルカメラを授業で使ったことはなかったけれど、私が子どもたちのノートを撮って、それを共同追究で紹介することはできそうな気がする。やってみよう。



全国的に先進的な取組をしている学校の事例から学ぶ

- (1) 情報教育係が、先進的な取組をしている学校の事例を文科学委託事業の「事例集」から、自校でも実践できそうな事例を紹介する。
(2) 実際に、校内にあるICT機器を操作し、事例の内容を模擬的に行ってみる。
(3) 学校全体として、または、個人として、実践できそうな学習場面を考える。

〈事例集に掲載されている実践事例〉

【小学校3年・国語（書写）】文字の中心に気をつけて書こう：毛筆

【小学校1年・算数】くり下がりのあるひきざん

【小学校4年・算数】垂直・平行と四角形

【小学校5年・算数】百分率とグラフ

【中学校1年・国語】「蓮菰の玉の枝」－「竹取物語」から

【小学校5年・社会】自動車工場をたずねて

【小学校4年・理科】ものの温度と体積

【中学校1年・体育】マット運動 他



教職員の人権感覚を磨くには？

ポイント

子どもの豊かな人権感覚を育むためには、教職員自身の人権感覚が重要です。教職員の人権感覚を磨くには講演会などで学習することも大切ですが、日頃の生活の中から考え、一人一人が参加・体験型研修をしたり、振り返ったりすることも大切です。

- (1) 今まで当たり前だと思っていたことの見返しをする。
- (2) 日頃の何気なく使っている言葉や態度が適切か振り返る。

(1) 今まで当たり前だと思っていたことの見返しをする

① 「これが常識」「当たり前のこと」と考え行ってきたことの中に、見方を変えると違和感をもつことはないでしょうか。職員会議や研修会などで検証してみましょう。

・例えば、「子どもは外で遊ぶのが好き」という見方から、「中で静かにしていきたい子どももいる」「日光アレルギーの子どももいる」「遊びたくなるような環境だろうか」等の見方に変えてみる。

② いろいろな意見を出し合う中で人権への意識が高まっていきます。意見を出しやすくする工夫も大切です。

〔改善の工夫例〕 少人数で考えを出し合う・一つの行事を取り上げて問題点はないか意見交換する・子どもの事例を検討する・規則や決まりについて反証を試みる等。

(2) 日頃の何気なく使っている言葉や態度は適切か振り返る

人権教育はすべての教育活動に位置付けられます。学校生活を場面ごとに区切って、具体的に考えていくようにするとよいでしょう。自分たちの言葉や態度についてチェックリストを作成してみると、自分の大切にしていることが分かり、人権感覚を振り返るために有効です。ほかの教職員の意見を聞くことは、新しい価値観や、気が付かなかった点についての示唆を得ることにつながります。教職員集団として人権感覚を磨いていける取組を工夫してみましょう。

- ① 子どもの呼び方、指示の出し方、評価の仕方に、相手を尊重する気持ちが込められているか。
 - ② 言葉の中に決めつけや皮肉はないか。
 - ③ できない子どもを問題視し「みんなできなくては」という価値観を一方的に植え付けてないか。
- ・例えば、ノートを提出することが課題の子どもに、「やっと出したんだね」「もっときれいに書けばいいのに・・・」「ほかの人は10回出してよ」等。

〔改善の工夫例〕 授業場面から具体的に学び合う・否定的表現を肯定的表現に変えるワークショップを行う（リフレーミング）・人権感覚が表れやすい場面を出し合う、チェックリストを自分たちで作成し・より人権に配慮できる教職員集団を目指す等。

教師の人権感覚を見返す研修

あなたならどう考える？ 人権感覚チェックリストづくり

S 中学校の取組例

○学校生活をいくつかの場面に分け、人権感覚に関するチェックリストを作成しました。

- ① 授業中
- ② 給食、休み時間
- ③ 部活動中
- ④ 保護者との懇談
- ⑤ 職員室で
- ⑥ 学校行事
- ⑦ 生徒会・児童会

〈それぞれのテーマに分かれてグループを作りチェックリストを作成する〉

指名するときに「〇〇さん」と呼んでいるかが大事かもしれないね。

何を答えればよいのか分かりやすくしたいですね。

指名が偏らないことも、大事だと思うよ。



○付箋等で意見を出し合った後、大切だと思う項目を10項目程度に並べてみました。

人権感覚チェックリスト 授業中編

- ☐ 名前を呼ぶときに「〇〇さん」「〇〇くん」と呼んでいるか。
- ☐ 時間になったら始めているか。

.....

○最後にチェックリストを使って一人一人が人権感覚を振り返りました。

【参加した先生方の声】

チェックリストを自分たちで作成することによって、普段の自分を振り返ることができました。

はっとすることが、いくつかあり、相手の立場に立つことが大切だと思いました。



チェックリストを作るときに、ほかの先生の意見を聞いたことがとても有意義でした。

「え？そんなことが人権に関係あるの？」と思うこともありましたが、人によって感じ方に違いがあると思いました。

発達障害など、特別な支援を必要とする子どもに対する指導は？

ポイント

特別な支援を必要とする子どもに関する研修はすべての教職員で行います。学校の実情に合わせ、特別支援教育コーディネーターの教職員が中心となって、研修係等と連携し、年間計画などに位置付けておくといよいでしょう。

障害の特性やそれに合わせた配慮、支援の実際をすべての教職員が十分に理解することはとても大切です。具体的には下記のような研修が考えられます。

- (1) 個別の指導計画を作成、活用する研修。
- (2) 特別な教育的ニーズのある子どもの理解と支援の具体についての研修。
- (3) 「授業のユニバーサルデザイン化」などテーマのある実践研修。

(1) 個別の指導計画を作成、活用する研修

① 通常の学級においても、特別な支援を必要とする子どもには「個別の指導計画」を作成し、関係者が共通理解した上で指導を行うことが大切です。

② 作成が初めての教職員もいるので、実際に1枚書いてみるという演習も有効です。その際、その子の姿を肯定的にとらえ、「可能性の芽」を導き出し、目標は具体的に定めるようにします。

③ 既に作成している学校では、活用したり、見直しをしたりする演習に取り組んでみましょう。

※ 参照 特別支援教育 教育課程 学習指導手引書 「共通・連携編」「小学校・中学校編」
「特別支援学校編」

(長野県教育委員会特別支援教育課のHPからダウンロードできます)

(http://www.edu-ctr.pref.nagano.jp/kjouhou/seishi_tokushi/syuppan/index.htm)

(2) 特別な教育的ニーズのある子どもの理解と具体の支援についての研修

① 発達障害などについて研修の必要性が生じることがあります。特別支援学校のセンター的機能や教育委員会が主催する研修会などを活用し、外部から講師を招いて子どもの困っていることや障害特性の研修会を行うと、教職員全体が共通の基盤の上に立って、指導・支援することにつながります。

② また、通常の学級で行われている工夫にもすばらしいものがありますので、日報を利用して紹介し共有していくことも大切です。

全員が「わかる・できる」授業を目指した取組のことです。

(3) 「授業のユニバーサルデザイン化」などテーマのある実践研修

① 支援が必要な子どもの個別の指導計画を基に、有効な支援内容や方法を考えて、実践してみましょう。その支援が、対象の子ども以外の多くの子どもにとって有効であることがあります。それをすべての教職員で共有できれば、その学校の支援資料になります。

② 職員会議の時間に、短時間でも実践発表の時間を入れると、支援方法を共有することができます。日頃から工夫をしている教職員もいると思います。用紙を回覧し、付箋で意見を集めていくのもよいでしょう。

③ 職員室に実践コーナーを設け、いつでも閲覧できるようにしておきましょう。他校の実践を、紹介し合ってみるのもいいですね。



みんなで取り組む特別支援教育

「個別の指導計画」を作成する

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちにも、計画性や持続性のある具体的な支援をするために、個別の指導計画を作成してみよう。



個別の指導計画って
どうやって書くの？難
しそうだな・・・。

大丈夫！特別支援教育コー
ディネーターが、皆さんの相
談に乗ってくれます。まず、
1枚書いてみましょう。



＜用意する物＞ ・個別の指導計画のサンプル ・記入されていない個別の指導計画（一人1枚）
・対象児童生徒の資料 ・必要に応じて手引書のコピー

1項目ずつ、参加者全員で以下の注意点を聞きながら記入する。（迷ったら相談しながら）

- ① 実態を書く → 「伸びてきているところ」「よいところ」「よい姿を生み出す条件、きっかけ」に注目。
- ② 可能性の芽 → 実態から「この条件ならもっとよい姿が見られそう」というところを広げる。
- ③ 保護者と本人の願い → 家庭訪問や懇談会、本人の言動などから核に成る思いを探る。
- ④ 教育課題 → 具体的で、達成できそうな目標を設定。
- ⑤ 支援の方向 → 教育課題達成のために可能性の芽の条件となる指導・支援の方向を具体的に書く。「できる状況づくり」を大切に。

※ 作成については特別支援教育 教育課程 学習指導手引書「共通・連携編」等を参照。

このあとは保護者と連携しながら作成、活用・見返し、加筆修正します。初めから完璧を求めずに作成し、PDCAサイクルにより、見返していくことが大切です。

個別の指導計画を生かした支援へ

職員会議での「私の一工夫」の発表（T小学校）

A先生のクラスには「読み」で困っている子どもがいます。

その子の「読む範囲を区切ることで文を通して読める」特性を生かして→ 様々な素材や色で製作したスリットの入った板を用意し、読む範囲が区別できるようにした実践を発表。

B先生のクラスには基礎的な学習に課題のある子どもがいます。

その子の「計算では九九を確かめることができれば、1時間通して授業に参加できる」特性を生かして→ 教室の側面の壁に、今扱っている単元の基礎となる事項（九九や漢字の表など）を掲示しておき、誰でも見られるようにするという実践を発表。

発表後は、用紙を回覧し、他の教職員の意見を付箋で貼ってもらい、誰もがいつでも閲覧できるように、職員室に掲示しておきました。

実際に書いてみたら、
子どもの見方が変わった
気がする。今度はこれを
生かしていきたいですね。



【実施した先生方の声】

「どの子にも分かりやすく」
授業をするという意識が高ま
りました。

子どもたちも学習への意欲
が高まりました。研修をやっ
てよかった。



Q26

生徒指導の充実を図るには？

ポイント

学級担任は、子どもの日常生活や学校生活の状況を把握し、適切に対応していくことが求められます。

- (1) 職員会議や学年会で、子どもの生活状況を話題にし、状況変化の兆しや対応を共有する。
- (2) 事例研修により、生徒指導を充実させる。

(1) 子どもの生活状況を話題にし、変化の兆しや対応を共有する

生徒指導では、子どもの言動、交友関係などの変化を敏感にとらえたり、教職員間で連携を図ったりするために、機を逃さない適切な指導・チーム援助が大切になります。

- ① 日常的に、子どものことを話題にできる体制を位置付けましょう。
- ② 職員会議で、子どもの様子や生徒指導事例等、生徒指導にかかわる話題を位置付け、共通理解を図りましょう。
- ③ 週番活動を生かした校内巡視を行うなども一つの方法です。
- ④ 1週間に1度、生徒指導主任等、生徒指導担当を中心とした短時間の連絡会を設定してみてもどうでしょうか。
- ⑤ ネット社会にかかわる知識を共有する場をとることも大切です。



(2) 事例研修により、生徒指導を充実させる

実際あった具体的な事例による研修だけでなく、生徒指導で予想されることや、対応に迷うケースなどの事例研修によって、状況変化の兆しに気付いたり、適切な対応ができたりするなどセンスを高めましょう。

- ① 「生徒の状況の把握について」「いじめの対応について」「発達障害と生徒指導」「家庭との連携について」など、テーマを決め、事例から学び合うことは、対応のあり方の共通理解につながります。
- ② 事例研修から、人格を否定するような言動は慎むこと、問題によっては毅然とした態度で指導するなど、生徒指導の姿勢についても学び合えます。
- ③ 生徒指導の対応として、状況の把握のみでなく、生徒自身が行為の意味やそれらがもたらす結果や責任などを理解できるようにしましょう。

社会の動きや子どもの生活状況を知り、生徒指導力を磨く

ネット社会の状況を知る

携帯電話やスマートフォン、タブレット端末などにかかわって、「名前は聞いたことがあるけれど、実際にはどういうものか分からないなあ」と、感じていることはないでしょうか。

資料による情報とともに、教職員が、実際に状況を確認することによって、ネット社会に生きる子どもたちの今とこれからについて対応する力を磨くことができます。

【例 「LINE」について学ぼう】

① 資料にて、「LINE」について知る。

- ・「LINE」のアプリケーションでできること
- ・新規に「LINE」を導入すると実際に起こること
- ・実際に起こることによって生じるトラブルの可能性と防止策

② スマートフォンを使って、実際に状況を確認してみる。専門家や利用している教職員の話を聞く。

③ トラブルの危険性の共通理解や、生徒指導のあり方について情報交換する。



新規に「LINE」を導入すると、「友だち」が自動追加されるな。友だちからのメール状況も分かるんだな。初期設定で、「友だち自動追加」をオフできるんだな。

《研修を発展させる》

- ① 生徒指導だよりで、アプリ等の情報を提供する。
- ② 授業参観日の折りに、親子でアプリ等について知る場を設ける。
- ③ 学級PTAの折りに、アプリ等について話題にし、保護者と連携を図る。

事例研修では・・・

事例による研修をしてみましょう。



それぞれの学校で、生徒指導で予想されることや、対応に迷うケースなどを事例にし、話し合ひましょう。
〈例〉「不登校の兆しの気付き方とその対応」「人間関係の雰囲気から何をとりえらるとよいか」等

《研修の進め方》

- ① 事例を提示する。ワークシート等を用意するのも有効。
- ② 最初に個人で考える。
- ③ グループ討議をする。
- ④ 各グループの討議内容を伝え、質疑応答の時間をもつ。
- ⑤ 全体で、参考にしたいことを確認したり、先輩の経験談を聞いたりする。

ポイント

幼稚園・保育所，小学校，中学校，高等学校の先生が，保育・授業を「見合う」，感じたことを「伝え合う」，違いを「受け止め合う」ことが，相互理解を深め，子どもの育ちと学びをつなげる基盤となります。

- (1) 異校種間での保育・授業参観や体験研修を行う。
- (2) 中学校区を基本として，幼・保・小・中で合同研修の機会をもつ。

(1) 異校種間での保育・授業参観や体験研修のもち方

先生自身が実際に子どもを見る，子どもと触れ合ってみることで違いを実感します。相互理解はそこから始まります。全員が一度は参加できるようにし，相互理解の一步を踏み出しましょう。

- ① 長期休業中には，1日保育体験研修をしたり，異校種間で教科指導や生徒指導の情報交換をしたりしましょう。その際，体験の後に感じたことを伝え合う場を設けましょう。
- ② 異校種間による乗り入れ授業は，相互の学習内容や子どもの成長過程などの理解につながります。

(2) 中学校区を基本とした合同研修のもち方

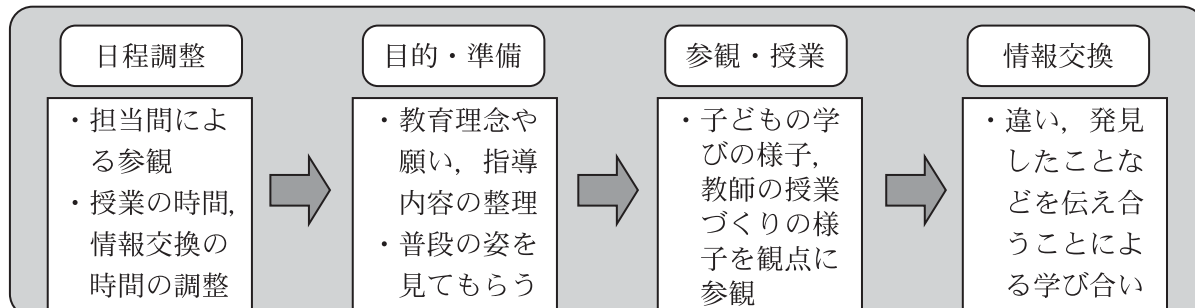
子どもの健やかな成長のために，次のような視点についての共通理解を図りましょう。また，合同会議で確認された連携内容について，職員会議等で共通理解を図りましょう。

- ① 各学校が目標とする子ども像や教育課程を伝え合うことで，仕組みや取組の違いを知るとともに，取り入れてみたいよさに気付くことができます。教職員が，違いやよさを共有することで，つながりの意識をもつきっかけにもなります。
- ② 特別支援教育にかかわって，「プレ支援シート」で，伝えたい，伝えて欲しい情報交換も可能です。意見交換によって，その子どもの全体像と，配慮したいポイントなど，精選した情報を共有することにつながります。
- ③ 次のような工夫は，高校との連携にもつながります。
 - ・授業参観
 - ・バザーなどを合同で行う
 - ・文化祭交流



異校種間による参観、乗り入れ授業の方法

研修の場を設ける



情報交換では・・・

少人数グループによる、ざくばらんな情報交換が、研修の質を高めます。

グループによる情報交換

- ・「違い」をキーワードに、参観や授業をしてみて気付いたことを付箋に記入する。
- ・付箋の記述を分類し、学び合ったことを確認する。
- ・自校の子どもへの支援のあり方や指導観について取り入れたいことをまとめる。

実践した学校や先生方の声

- ・園児が、プール遊びで全身を使って水に親しんでいて、すごいと思いました。
- ・小学校の先生は、子どもが生き生きと遊ぶ姿に対して好意的でした。



進学期・入学期の支援のつなぎ方

情報を伝える、共有する

○職員会議に短時間、特別支援教育コーディネーターによる移行期の支援のポイントを紹介してもらう。

〈例〉

- ・情報の伝え方 「できない情報」よりも「できる情報」を。
- ・共有の仕方 連絡会議等における、顔を合わせた情報伝達、保護者の意向を尊重した情報共有のあり方。

異校種間で、子どもの育ちをつなぐポイントを学び合う機会となります。



ポイント

子どもの学校生活の様子などを家庭へ伝えることで、保護者は安心感を抱きます。また、保護者の気持ちを理解しようとする姿勢は、信頼関係を高め、子どもの成長を共に支え合う関係を築くことができます。

- (1) 学年会等で、学校・学級の様子や方針の伝え方について情報交換する。
- (2) 子どもの成長をともに考え合うために、保護者の思いを共有できるようにする。

(1) 学年会等で、学校・学級の様子や方針の伝え方について情報交換する

伝える方法、内容について話題にし、保護者の理解や安心感を得られる工夫の引き出しを増やしましょう。

- ① 授業参観や学級懇談会など学校行事の場は、学級の様子や教育方針について伝えられる機会です。どのように伝えるとよいか話題にしてみましょう。
- ② 親子レクリエーションなどの活動のもち方を話題にし、内容や保護者の反応について情報交換しましょう。
- ③ 学級通信や連絡帳、電話連絡などを活用した保護者との連携について心がけていること、失敗談や対処方法などについて語り合しましょう。

(2) 子どもの成長をともに考え合うために、保護者の思いを共有できるようにする

保護者の話を聞いた上で、「子どもたちがよりよく育ってほしい」という思いを共有できるようにしましょう。

- ① 「誠意をもった対応」「保護者の努力への理解・不安感の排除」「子どもについて共に考え、育てるという姿勢」などについて教職員同士で学び合しましょう。子どもを真ん中において学び合うことで、保護者と教職員は一緒に考える仲間であることの意識が高まります。
- ② 「子どもについて共に考え、育てるという姿勢」を意識した日々の取組が、保護者との信頼関係を築いていきます。



学級通信や連絡帳で連携を深めるために

学年会で話題にしましょう

授業の様子と共に、家庭学習で調べる内容をおたよりに書いたら、お家の方が協力してくれた。

委員会活動へ意欲的に取り組む様子と担任の気持ちをおたよりに書いたら、参観日に喜びの声をいただいた。



保護者会で、おたよりへ日記などの子どもの作品を紹介することを伝え、掲載に理解を得た。

連絡帳で、子どもの頑張ったことを伝えることも、保護者は喜ぶよ。

よいと思ったことは取り入れましょう

- ・自分が取り入れたいと感じたことは、実際にやってみましょう。
- ・実際にやってみた後の反応についても話題にしましょう。
- ・自分が工夫した点も伝え、互いによりよいものにしていきましょう。
- ・おたよりを、学年会で交換したり、職員室に掲示したりしましょう。

保護者と思いが共有できるようにする

「お子さんの課題について、保護者と一緒に考える」などをテーマにしたロールプレイで、子どもを真ん中におき、保護者と教職員は一緒に考える仲間であることを意識する研修をしましょう。相談員など専門家を招いて、話し方、聞き方のツボを研修することも考えられます。

話し方、聞き方を学びましょう

- ・学校へ来ていただいて話をする場合でも、電話で話をする場合でも、時間を作ってくださったことに感謝の意を表すと、協力的になっていただけます。
- ・まずは話を聞きましょう。
- ・保護者の気持ちが、どこに重きが置かれているか、ポイントとなる気持ちを理解しましょう。

今までよく励まし続けて来られましたね。

そういう理由で、登校を渋っていたのですね。

1ヶ月前の友達との口論をきっかけに、息子が登校を渋るようになりました。



先生役

保護者役

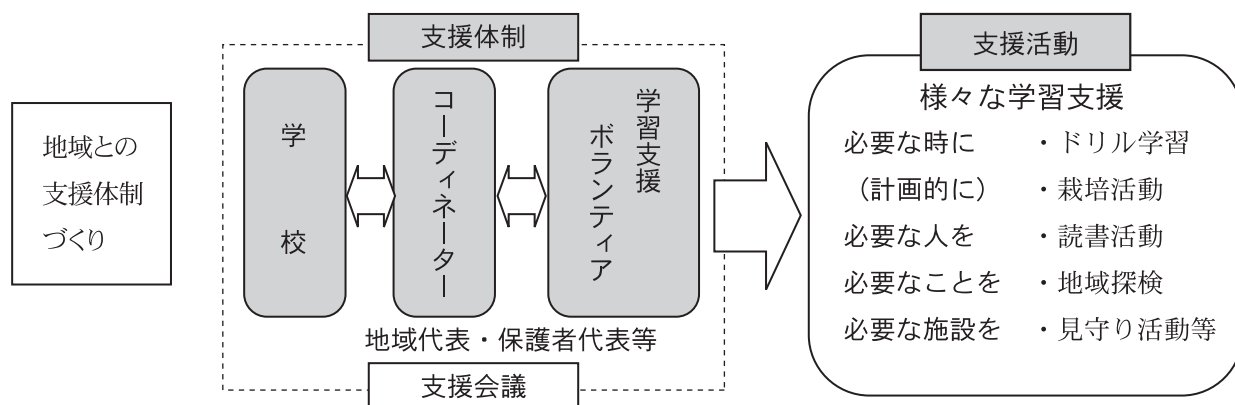
ポイント

学校と地域の方との関係づくりは、子どもたちの健やかな成長を促します。学校が目指す子どもを育むためには、教職員が地域を知り、地域に自校の教育を知ってもらい相互理解の関係を築くことが大切です。

- (1) 教職員が地域の特徴や子育て支援の仕組みを学び、地域で子どもを育てるよさを知る。
- (2) 学校の様子や子どもの成長に寄せる願いを地域に発信し、協力・理解を図る。

(1) 教職員が地域の特徴や子育て支援の仕組みを学び、地域で子どもを育てるよさを知る

- ① 区長、学校評議員などに地域めぐり研修の講師を依頼し、地域を知る機会を設けましょう。地域の歴史・文化・自然を知ることによって、地域の特徴やよさについて共通理解が図れます。
- ② 地域にある放課後子ども教室などの様子を見学し、子育てに対する地域の努力や、学校を離れた子どもの様子を理解しましょう。理解したことが、日常の学校生活の指導・支援に生かされます。
- ③ 地域の方と話す機会をもつことにより、教職員の顔を知ってもらうだけでなく、信頼関係を築けます。



生涯学習推進プログラムNo.2 より

(2) 自校の様子を地域へ発信する

自校の様子を知ってもらうことで、子どもの成長の協力基盤を整えましょう。

- ① 学校だよりの回覧や地域開放型の参観日などを通じて、地域の方に学校への関心、協力が得られるようにしましょう。
- ② 学年会等で、学校だよりの原稿や地域から寄せられた感想を基に、地域とともに子どもの成長を育むよさや工夫を話題にすることは、地域との連携を意識することにつながります。

地域との連携の充実に向けて

体験活動で、地域に出かける、地域の方を招く

子どもが地域の人と触れ合うことを通して、自分の生き方を考えるようになります。

(1) 地域に出かける体験活動

- ① 地域の人と触れ合うことができる体験活動を整理しましょう。

地域探検、自然体験、地域清掃、工場見学、職場体験、地域ボランティア活動、地域行事など、各学校の教育課程に位置付けられているものを整理する。

- ② それぞれの体験活動で、地域の人とかかわる場所・内容を整理しましょう。

地域探検ならば、児童生徒が、興味・関心をもちそうな場所にかかわる人、学べそうな内容を構想する。

学年会等で、ざっくばらんに語り合いましょ

- ③ 区長、学校評議員などに相談し、体験活動を支えていた人を紹介してもらいましょう。

- ④ 自分と地域のつながりの理解、地域の一員としての自覚などにつながる内容をとらえましょ

- ⑤ 職員会議等で、地域と連携した体験活動の実践から学びましょ

(2) 地域の方を招く体験活動

地域の方を招いた体験活動では、次のような実践が考えられます。

- ① 子どもと教職員で、地域の自然や文化など興味ある事柄について講座を設定します。

(例) 郷土料理、昆虫採集、空手等

- ② コーディネーターから講座の講師をコーディネートしてもらいます。

- ③ 子どもが、それぞれの講座で活動を体験します。

- ④ 講座で学んだことや印象に残ったことなどを振り返ります。学んだことを展示、発表することもいいですね。

- ⑤ 講師の方にお礼状などをお渡しすると、地域の方との結び付きが高まります。

子どもは、講師の体験談やアドバイスから、本物に出会う感動や憧れを抱きます。また、地域の方を招いた体験活動は、職業観や自分の可能性に気付く場にもなっています。



様々な機関と連携するには？

ポイント

様々な機関と連携し研修を行うには、研修の目的や願いを明確にするとともに、連携する機関からの学校に対する願いを受け止める必要があります。

- (1) 様々な機関との連携に向けて、学校側の願いを明確にする。
- (2) 連携する機関と願いや思いを共有していく。
- (3) 連携のあり方は常に見返す姿勢をもち、連携をよりよいものにしていく。

(1) 願いを明確にする

連携は互いに手を携えることから始まります。「〇〇の話をお願いします」「例年通りお願いします」等、時として学校は、目的を明確にしないままに学校の都合だけで、様々な機関にお願いをしてしまうことがあります。様々な機関との連携した研修を考える際には、求めていることを明確にし、伝えるようにしましょう。

(2) 連携する機関と願いや思いを共有していく

- ① 子どもの成長を願っているのは学校だけではありません。子どもを取り巻く地域の方々をはじめ、多くの方々も同様に成長を願っています。しかし、成長を願っていることは同じであっても、願いの方向が同じであるとは限りません。願いの方向を共有して研修することで、研修成果も、より子どもの指導に反映させることができます。
- ② 願いの方向を同じにするとは、どちらか一方が他方に合わせることはありません。連携がより強固に長く続くためには、子どもの成長を視点に、互いが納得できるように研修のあり方を話し合う必要があります。

(3) 連携をよりよいものにしていく

子どもの実態や地域社会の実態等をとらえて研修しましょう。連携がマンネリ化し、十分に機能しないといったことがないよう、実態の変化に応じて、研修の内容や方法、連携のあり方を見直していきましょう。

様々な機関から学ぶ

◇例えば「学校の組織改革に生かす研修がしたい」という場合

○願いを明確にしよう

研修に向けて学校の願いを明確にする。

- ・PDCAサイクルの向上に向けて、「目標を着実に果たし、さらなる向上に向かう方法」を知りたいな。
- ・トップダウン型からボトムアップ型の組織にしたい。どのような組織改革が有効なのか知りたいな。



○研修先を探そう

地域の企業や経営者協会などから情報を集める。

○外に出て研修しよう

講師を学校に招くばかりでなく、自ら外に出て研修する。

○様々な機関との連携を教職員の資質向上・学校経営に生かそう



◇例えば「子どもの学びに生きる研修がしたい」という場合

○学校の願いを発信しよう

地域の方との懇談など外部の方と接する場で、常に学校の願いや考えを発信する。

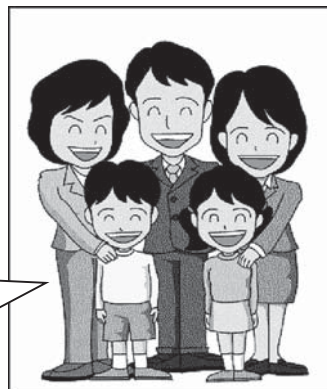
○連携する機関と願いを共有しよう

教職員が研修したいこと、子どもたちの教育に生かしたいことを明らかにしておくことが、連携する機関からの支援を得ることにつながる。

○願いが実現する研修をしよう

子どもの成長を視点に共有した願いが、実現できるような研修をする。

- ・社会への奉仕を理念としている「A社」の考えを、子どもたちに伝えてほしいな。
- ・職場体験に向けて「◇◇」のような願いをもっている生徒たちを、「B社」で生かしたいな。



- ・会社の技術力の高さを感じてもらうために「◇◇」のような願いをもっている生徒に来てもらいたいな。
- ・地域の活性化に貢献する会社の姿勢や、そこに自分の力を生かすことの喜びを感じてほしいな。

コラム⑤

【学校であったヒヤリ・ハット】

ある暑い日のことです。学校のイベントで太鼓の演奏の発表がありました。子どもたちはとても楽しみにしていました。その中に大きな音を苦手とするAさんがいました。

担任の先生が「大丈夫？」と尋ねると、Aさんは「太鼓は大丈夫」と答えました。いよいよ発表が始まりました。威勢のよい掛け声とともに、大きな太鼓の音が鳴り響きます。初めはびっくりしていたAさんですが、すぐに落ち着いて自分の席で聴いている様子が見られました。「大丈夫そうだな」と安心していたところで、2曲目が始まりました。2曲目には太鼓のほかに鐘の音が入りました。「カン、カン」という音が太鼓の音に混じり、響いてきました。その時です。Aさんは耳をふさぎながら立ち上がり、体育館の外へ一目散に走り、出て行ってしまったのです。担任の先生や近くにいた先生方が急いで後を追いました。Aさんは体育館から外へ出て、道路の向こう側まで一直線に走っていき、やっと止まりました。幸い、車が通らなかったもので、大丈夫でしたが、車が通ったら・・・と思うとぞっとします。

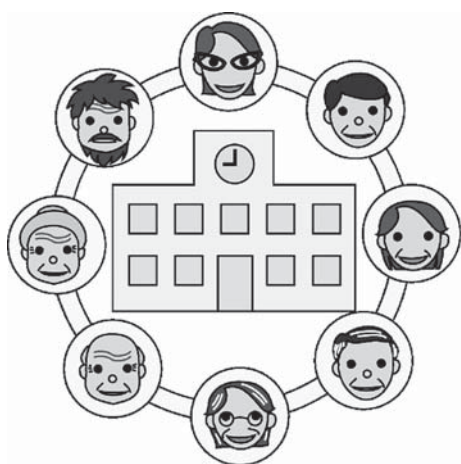
子どもの中には、ある特定の音がとても苦手な子があります。Aさんは鐘の音が、我慢できないほど苦手だったのです。それを把握しておくことはもちろん、どんな音がするのかりハーサルを見たり、プログラムを確認したりしておくことが大切だと思いました。



【思い出に残っている地域や保護者との取組】

理科でメダカの学習をした子どもたちは、メダカを地域で育てたいと考えました。そんな子どもたちに、「メダカ池を一緒に作りませんか」と、地域の里山活性化委員会の会長さんから電話が入りました。これをきっかけにして、地域や保護者を巻き込んでメダカ池づくりが始まりました。

「メダカが安心して住める池を作りたい」という構想をもって、子どもたちと一緒に会長さんのお宅を訪れました。「なんか夢があっていいねえ」と声を掛けられ、思わず微笑む子どもたちの姿が印象的でした。その後、スコップで休耕田を掘る子



どもたちに、「やあ、よく頑張ってるじゃないか」とさりげない会員の声が伝わり、さらに体を動かす子どもの姿が見られました。そして、メダカ池づくりを頑張る子どもの姿が、保護者にも伝わり、協力の輪が広がっていきました。

また、完成したメダカ池に毎日通っていた子どもたちが、ある日、「あっ、メダカの赤ちゃんがいる！」と、歓声の声を上げたときのこと。新しい命が生まれていることを会長さんに伝えに行った子どもたちが、うれしさいっぱいに戻ってきました。きっと、会長さんから温かい言葉をもらったのでしょう。

現在も、里山活性化委員会の皆さんには、引き続き子どもたちの教育活動を支援していただいています。地域や保護者の温かさに支えられたメダカ池づくりを通して、子どもも教師も、地域で生きる喜びを知り、育ててもらったのだと感じています。